元八王子町の古木・名木紹介
(八幡神社の梶原杉)

建久２年(1191)に源 頼朝が鎌倉の鶴ヶ丘八幡宮を建て直した際、重臣の梶原景時に古い御神体（甲冑馬上の木像）を下賜した。そして景時はこの元八王子の地に鎌倉八幡宮として神社を建てて御神体を移したのが八幡神社の起こりと言われている。
また、梶原杉はこの時、梶原景時がお手植えしたものと言われ、御神木として約８世紀の永きにわたり世の移り変わりと栄枯盛衰を見守ってきた。地上から１０ｍ付近の幹から枝が広がり葉が下向きについていることから「逆さ杉」の愛称があった。

しかし、残念ながら昭和４５年頃から急速に樹勢が衰え遂に昭和４７年(1972)に枯死したため伐採し現在のような保存措置がとられた。
当時の天然記念物記録資料によると
・樹令：７８１年
・樹高：約３０ｍ
・幹の太さ：目通り約１２ｍ
で、その巨木ぶりが偲ばれる。

関東では神奈川県の「中川の箒杉」に次いで２番目に大きい杉であった。
なお、梶原杉の切株の年輪標本が八王子市の郷土資料館と高尾自然科学館に展示されている。

＜受難の銘木＞

根本が巨大な空洞になっていることから二度に亘り火災に遭っている。最初は大正時代に浮浪者が寝泊りして失火、二度目は昭和 38 年子どもの火遊びで失火し、この時は煙突効果で上部まで焼けた。しかし、ご神木であるためか落雷で火災になったことはないと言う。伐採後に宮司（梶原正義氏）が後を追うかのように亡くなられたという悲しい物語も残っている。

八幡神社の入口

御神木・梶原杉の切株

昭和３０年代「梶原杉の勇姿」